

終わりと始まり

まずは個人的な話。自分が老いたと思つ。それが日々実感される。身体能力が少つ失われる。基礎代謝が減るとはいついことか。食物として入ってくるエネルギーを活動に変える機能が低減する。身体の方がもつとそんなに動くなど言っているかのよう。無理に食べても無駄に肥るだけ。我が血流は消化が衰行か思考の1つにしか行かない。1つのタスクが同時に実行できない。足元がぼつかない。駅の階段を下る時は一歩ずつ決意して踏み出す。歩道のわずかな起伏に躓きかねない。長く坐っていた後で立つと尻尻。万事ゆつくり。万事慎重。つまの愚図。視力が落ちる。以前は乗り物の中ではいつも何か読んでいたのに、最近ほだいていばんやひして。いつか車の運転を止める日がくるだろう。

キーボード入力を選び。ぼくの右手の人差し指はペーパードット印刷で少し左に曲がった上にねじれている。スマホを打っていて、指先のどの部分か面に触れるかわからないので「ア」が多い。何度やっても。小さな字が読めない。振の仮名の「ア」の「ベニ」なんて聞かなくて大変だ。しゃべたスマホの暗い店内でスマホを貰って、さて、気取った長い料理名が読めない。老眼鏡に装着する小さなLEDを作つて売つたらどうか。各付けて「スマートフォン」。

身に染みる衰え 老いては若きに席を譲ろう

身体能力が足りないからエネルギー半一を節約する。つまりすべてにおいてカインターが頭に入っていないか。スマホは使っているがアプリの類は最小限に抑えている。新しいものを入れてその用法を身につけるのが面倒くさい。藤永茂さんに『おいはれ犬と新しい言葉』という名著があった。海外に

小ざな字が書けない。遠方の身内に毎月送金している。相手も老いているので口座振込ではおぼつかない。現金書留という古典的な方法に依るわけだが、この封筒の「お届け先」の欄が小さい。住所の部分は二行だけ。実質六九冊×二冊では長いマシヨン名が書ききれない。封筒そのものは大きいのだから周囲には空き地がいくらでもある。なんどかして、どつどつ言うのが我ながら老人めいている。

(冗談として言うけれど、先日行つた京都のさる店は「京都府京都市東山区高台寺北門通下河原東丸尾町〇〇〇」という住所であった。さてこの二十八字を「お届け先」欄にどう書く? こつこつ住居表示を今も使っている京都人をぼくは尊敬するものであるのだが。)



池澤夏樹

出た科学者のエッセーだが、三十五年前この本の表題が今になって身に染みる。新しい若き身につかないのだ。知的好奇心が衰えた。新しいものに飛びつかなくなつた。旅に出る時、昔ならば事前にずいぶん予習をしたのだが、最近を着いてからインターネットに頼る。もの見かたが浅くなつていないか。

ほく個人のことではどうでもよい。愚痴なしい線の間き流していただいて結構。しかし社会の高齢化というのはまのぼくのような老人がどんどん増えるといことである。申し遅れたがぼくは今七十四歳二か月。来年は後期高齢者。その後は晩期高齢者で、やがて末期高齢者。新しいシステムは若い人が作る。それを次々に覚えて使つて遅れない先「欄」にどう書く? こつこつ住居表示を今も使っている京都人をぼくは尊敬するものであるのだが。)

身体能力が足りないからエネルギー半一を節約する。つまりすべてにおいてカインターが頭に入っていないか。スマホは使っているがアプリの類は最小限に抑えている。新しいものを入れてその用法を身につけるのが面倒くさい。藤永茂さんに『おいはれ犬と新しい言葉』という名著があった。海外に

社会的平均年齢が年々上がる。若い世代を準備しなかつたのだから当然である。我々は商業資本とテクノロジーが提供する目の前の悦楽にかつかど身を任せ、出産・育児・教養という投資を怠ってきた。国の無策は今さら言うまでもない。書きながら、悲憤慷慨でもない。いざれ退場する身とは承知している。では若い人に席を譲ろう。年下の諸君、幸運を祈る。